



五在所神社

## 五在所山と北方の絶景

越知町最北端の桑葦地区と旧吾北村（いの町）下八川十田との境界に五在所山（976m）と呼ばれる山がある。山頂付近には「五在所神社」があるが、「五在所」の名前の由来は、近隣の鎌井田・片岡（越知町）・十田・新別・下八川（旧吾北村）の五つの在所民が特に崇敬したためと言われている。

五在所神社は、江戸時代には「五在所権現」と呼ばれ、土佐藩歴代の藩主が崇敬したといわれている。そのためか、標高1000m近い人里離れた山の上にある神社にしては、本殿（本社）は総檜造りで、それを覆う鞘堂の屋根は銅版葺きで、妻部分には千木と2本の鰹木（真中1本欠落？）があり、大変凝った造りとなっている。祭神は「大山祇命」で、千木の先端の切り口が縦に垂直であることから「男神」であることがわかる。

ただ、江戸時代の享保年間までは「由綱大権現」と呼ばれていたことや、「女人禁制で天狗が出没する」といわれたりしていたことなどから推察すると、「天狗」は修験者を表すと考えられることから、修験道関係（横倉山修験道？）の神社である可能性が高い。実際、これの西方の越知町と仁淀川町（旧吾川村）との境にある黒森山（1017.3m）も、熊野藏王権現を勧請した修験道の道場であり、これとの関連性が強いことが連想される。また、字は異なるが、旧香北町（香美市）の「御在所山」（1079m）が安徳天皇の行在所があった所とされ、横倉山のように、安徳天皇潜幸伝説の残る所は往々にして修験道の道場と重なる場合が多く、実際、五在所山は「安徳天皇皇妹ノ霊ヲ祀レリ…」〔高知縣土佐国吾川郡鎌井田村誌〕、1882とあり、また、古くは「御在所（山）」とも書いたようで〔土佐州郡志〕、宝永4 - 享保

7（1707 - 1722）年〕、そのことを考え合わせると、興味深いものがある。

五在所神社境内のすぐ南下段では、毎年旧暦9月1日に「神相撲」と呼ばれる奉納相撲が行われる。元々、この「神相撲」は、神社の南方約500m下にあった山の上の野外相撲場で昭和30年代から行なわれていて、周辺各地から力自慢の力士が十数人ほど集まり、相撲は何番も取り、懸賞金が付いたそうである。この野外相撲場の土俵を取り巻く直径70mほどの場内には、山の斜面を平坦にした棧敷が東面に3段、西面に10段ほど設けられており、かつては100人近い観客が白熱した勝負を観戦し、場内の一角の北隅には出店も2軒ほど出るなど大いに賑わったという。我が国でも恐らく他に類を見ないであろう「天空の野外相撲場」がこのまま消え去っていくのは甚だ残念な気がする。

五在所神社裏側はなだらかな丘陵になっていて、所々にモミの巨木（立ち枯れ）やアカガシの中木～巨木が点在し、アカガシの自然林が一部残っている。かつてはこの辺一帯も横倉山のようなアカガシの原生林だったのである。すぐ東側が稜線上の緩い頂上部の五在所山山頂（976m）で、「五在所山眺望所」\*になっている。その北側は急崖で前方を遮るものがなく、北方には東西方向に連なる三連山が見渡せ、一番奥の連峰・四国山地には遙か東は平家平から、笹ヶ峰・寒風山・瓶ヶ森を経て石鎚山を一望できる。特に、冬場には山頂付近に雪を頂いた雄大な連山の姿が望め、その眺めはまるで北アルプス連峰を連想させるかのような光景で実に美しく圧巻である。

\*桑葦集落から御在所山眺望所まで約3\*で、所要時間は1時間弱。登山道は、五在所神社の参道で幅1.8～2m、大変きれいで歩きやすく快適である

## 「四国のツキノワグマについて」－戦前の記録－

大倉 浩典



剣山系のツキノワグマ  
(写真提供：四国自然史科学研究センター)

2016（平成28）年は、本州のあちこちでツキノワグマに人が襲われる事例が相次ぎ報道され驚いていたなら、何と高知県でも7月21日安芸市古井の林道に現れたクマをカメラで撮影し新聞・テレビで報道された。また8月16日の高知新聞では「石鎚山系にツ

キノワグマ？」の見出しで、いの町寺川の県道石鎚公園線で道路を横切る親子のクマを、更に7月中旬にはその近くの旧寒風山トンネル近くの町道瓶ヶ森線でも親子グマを目撃したとの情報が寄せられ、いよいよ高知県でも山歩きの際にはクマに用心が必要かと思われるようになってきました。

現在四国では、2004（平成14）年から継続してNPO法人「四国自然史科学研究センター」（高知県須崎市）が中心となり「四国森林管理局」と共同で四国のツキノワグマの生態調査を行っている。その結果、現在四国では、高知県と徳島県に

またがる剣山系とその周辺のいずれも1,000m以上の6地点で、センサーカメラによるクマの撮影に成功、生息数の推計は十数頭から数十頭と考えられている。今回情報が寄せられた3ヶ所は想定外の場所で、今後の調査で新たな事実の判明が期待されます。

四国のツキノワグマは、環境省のレッドデータブック（2014年版）で絶滅の危機にある地域個体群とされており、ニホンジカやイノシシのように殖えすぎても困るが絶滅だけは何とか避け、程よいバランスで共存できたらと考えます。

さて、昔は四国にどれだけツキノワグマが生息していたのか気になり、色々と資料を探していた所、高知博物学会刊行の博物学会報『土佐の博物』第9号〔1941（昭和16）年〕に、会員で旧制高知県立海南中学校（現高知県立小津高等学校）教諭・岡藤蔵先生が1940（昭和15）年に発表した「四国の熊に就いて」という戦前の四国に於けるツキノワグマの調査をされた貴重な論文を見つけたのでご紹介致します。

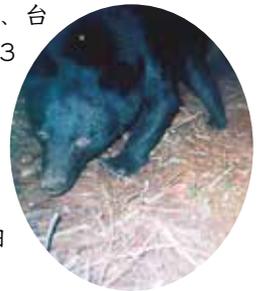
熊は内地に棲息する唯一の猛獣である。然し何かしら人懐こいその眼ざしや容貌は一種の親しみ易さを感じさせるものがある。昔は土佐にも澤山棲んでいたらしい。熊と名のつく地名も相当残っているし、動物名を採った人の名前も多い。土佐には熊太郎や熊吉・熊吾などさては八公・熊公の愛称に至るまで、尚女性の名にもクマなど珍しい事ではない。熊も時勢の推移と共に段々に其の跡を絶って今は僅かに人跡稀な深山に幾何もない種の余命を保って居るのである。四国には熊は居ないなどと其の道の人からも忘れられた程に!!

この際郷土四国に於ける其の生息状態など紹介するのも徒事ではなからうと思って今迄の調査を不備のまま、書いてみることにした。

### 〔熊の分類〕

我国の熊は4種類である。第1は赤熊で、この中には北海道や南千島に棲むヒグマ、樺太や北千島に棲むアカグマが含まれる。中でもヒグマは最も獯猛で北海

道では年々4～500頭の馬と平均3人位の人とその牙にかかって殺される有様である。第2は黒熊で内地産のクマ、朝鮮のチョウセングマ、台湾のタイワングマが含まれる。第3は朝鮮のチョウセンヒグマ。第4は偶々北千島の沿岸に漂流して来るホッキョクグマである。この内、内地産のクマはツキノワグマと呼ばれる種で前胸部に約20%の三日月形白斑を現した黒熊である。



### 〔四国に於ける分布〕

クマは容易に人前に姿を現さず、僻遠の高山密林地帯に棲み、従って高俊にして原始林に富む四国の尾根は彼等が絶好の棲家である。然し乍ら時勢と共に文化の嵐は彼等の本拠をも容赦なく荒してその生活圏は次第に狭小となり今は只東西2ヶ所に其の命脈を保つに過ぎない。(分布図参照)

A区域は幡多郡四万十川上流黒尊山国有林を中心と



### 〔熊の習性と被害〕

クマは雑食性で殊に飢ると何でも食する。木の実では椎・栗・榎・榊・クルミ・楊梅等々。樹上にて小枝を折り取りて食し、樹下の仔熊にも投げ与えるなど愛嬌がある。蛇・トカゲ・蟻殊にカニは彼の最も好物とするところで、一々大石を引起して捕る、この時仔熊に怪我させぬよう石は必ず山の斜面の下側より持起すなど面白い。4～6月頃樹液の上昇する頃造林地に於て檜・樅等の樹皮を地上2尺に亘りて剥ぎその形成層を喰う、特に3樹齢20～30年の勢強きものを選び被害1ヶ年数万本に達し甚しきは枯死するものもありという。下記は中村営林署管内の被害見込調である。

1. 黒尊地域	造林地被害本数	22,000本
2. 玖木山地域	〃	1,480本
3. 勝間地域	造林地被害本数	17,500本
4. 手洗川地域	〃	4,200本

営林当局に於ては此の森のギャングを防除するため年中捕獲に従事せしむると共に狩猟期に懸賞金附にて捕獲奨励をなしている。即ち下記の公告が毎年署の掲示板に貼出されて行人の注意をひくのである。

### 公 告

- 金五拾圓也  
中村営林署管内国有林ニ於テ熊ヲ捕獲セシ者ニハ謝礼トシテ一頭ニツキ金五拾圓也ヲ贈呈ス。
- 期間ハ昭和14年11月1日ヨリ全15年4月15日迄トス。
- 熊ヲ捕獲シタル時は解体前ニ担当区官舎又ハ営林署ニ於テ検査ヲ受クルコト及左前肢ノ爪ヲ営林署ニ提出スルコト。

以 上

なお樹皮を剥ぐのを防ぐためにはペンキコーラターを樹幹に塗布してその臭気によりて被害を免れる方法が講じられている。熊の捕獲数はA区域に於て毎年平均一頭位、昭和11年度は四頭を得た事もあり。B区域に於ては同様に一頭平均、年により二頭・三頭のこともある。結局は滅亡の外ないだろう。

熊は春彼岸頃より12月中旬頃まで食を求めて広範囲に移動徘徊し、厳寒の頃は高山の樹洞岩穴等に穴居する。4～6月頃剥日皮、7月頃楊梅の果実、9～11月頃は椎・榎等の果実を食い昼間は多く穴居し夜間主として食を漁る。梅雨頃交尾し2月頃一仔を産む。平常は独居し偶々仔連のクマに出逢うことがある位で、この点食肉獣の特徴を現している。然し決して積極的にひとを襲撃するような事はなく、よく自己の性格能力を自覚しているかのようである。即ち臂力こそ強大であるが虎豹の狡猾さも知略もなく、動作緩慢、

して目黒山・滑床山・鬼ヶ城方面より愛媛県御檜村国有林及津大村玖木及大川筋村勝間並に宿毛営林署管内大物川下藤事業所に亙る原生林の一帯にして毎年の出現数推定黒尊山一帯に20頭、愛媛県方面に10頭、その他5頭位である。而して彼等が季節的に食を求めて徘徊する地域の広大性を考慮すると現在頭数約20頭と推定される。

B区域は土阿国境一円の地域にて剣山西麓より東祖谷山豊永山落合山より大枡方面に亙る、中には東熊山・西熊山等クマに因める山の名もある、推定頭数12～3頭である。

a区域は幡多郡三原山塊、高峻の地で、3～40年前迄は棲息したとの古老の言である。同地区は中村より宿毛に至る中筋川に沿ふ断層谷※によってA区域との連絡を失ひ遂に現在の如く、滅亡したものと思はれる。

b区域は愛媛県上宇穴郡川瀬村遅越山一帯の石鎚山系の西に延びた地域で5～60年前迄は棲息したらしい。即ち同国有林は旧藩時代の造林にかゝる檜林で、現在樹齢80年の檜の根元に剥皮による癒瘡の跡が残り古老の言によりクマの被害によるものと認定されるものである。

c区域は安芸郡北川村野川山一帯にて約80年前は棲息せりという。

d区域は物部川上流檜山川・徳島県に跨る杉熊山国有林にして老獵師の証言として40年前には少数棲息したりという。

之を要するに、往古人跡稀なりし四国脊梁山脈はクマの楽園なりしものが溪谷、河川、地峡等による地域別に爾後の各個討伐に逢いて次第に撃滅され、其の数を減ずると共に棲息地区数をも減じて現在は僅かに東西2ヶ所の地区に餘喘を保つに過ぎないものと考察されるのである。それにしても西は四万十川東岸より東は吉野川左岸に亘る広大な四国の主嶽に於ける急激な絶滅の原因如何。或は地質・気候等より来る植物の種類に伴う食物も重大な関係を有するものではないか。今後の研究を要するものと思う。

ずんぐりむっくりした<sup>かつこう</sup>恰好はむしろ無邪気で少し間の抜けた動物である。但し仔を愛する情深く山中にて仔連のクマに出逢う最も危険視されている。

尚論文ではこの後昭和11年中村営林署の作業員で幡多郡大川筋村のKさんが仲間20名程で国有林の手入れの作業中仔連れに熊に襲われ、大怪我をし病院に運ばれ幸いにも九死に一生を得た貴重な体験談が書かれてありますが、これは割愛し以上は取り急ぎ纏まらないまゝ書き連ねたが将来研究したい点も多々あり偏に諸賢の御教示と御支援を仰ぎたい。末文<sup>なが</sup>乍ら豊富な資料を戴いた営林局の各位・地方有志の方々並に東京文理科大学 高島春雄氏に深甚<sup>しんじん</sup>の謝意を表すと共に

Kさんの御多幸を祈る。(昭和15年11月20日)

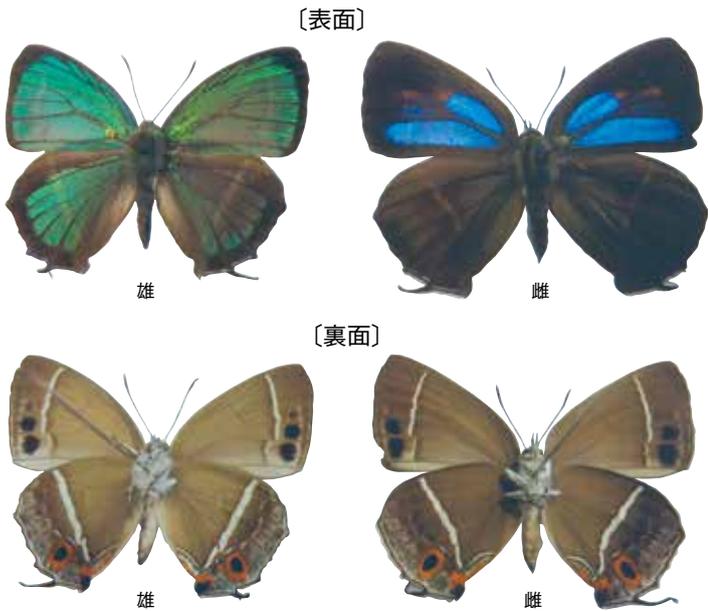
尚A地域では1985年(昭和60年)に旧葉山村で確認されたのを最後に其の後確認できず、現在A地域ではクマは絶滅したものとかがえられている。

※四国南西部の中村より宿毛に至る四万十累帯中の幅2~7<sup>キロ</sup>の東西性の地溝帯である「中筋地溝帯」に相当すると思われる。本地溝帯の北縁の断層は「中筋構造線」と呼ばれ、その北側には上部白亜系が、南縁の断層の南側には古第三系が分布する。つまり、「中筋地溝帯」は白亜系と古第三系とを分かつ地溝帯ということになる。「地溝」とは、ほぼ平行な2本以上の断層によって限られ、その間が相対的に沈降して形成された狭長な地形的凹地をいう。

(おおくら こうすけ / 植物研究家)

## “森の宝石” ヒサマツミドリシジミ ～横倉山初～

安井 敏夫



横倉山産 ヒサマツミドリシジミ

快晴で残雪のある寒い2014年2月22日、“森の宝石”と呼ばれる美しいシジミチョウ科の蝶(ゼフィルス: *Zephyrus*)で、横倉山でこれまで未報告の「ヒサマツミドリシジミ」(*Chrysozephyrus hisamatsusanus*)の卵が、産卵木となるウラジロガシの新芽の元に産みつけられているのが確認された。ヒサマツミドリシジミは、雄の翅表に金緑色の光沢をもつミドリシジミ類の一種で、漢名: 久松緑小灰蝶。和名は本種が最初に発見された鳥取県の久松山<sup>きゅうしょうざん</sup>を読み替えて付されたものであるが、現在は久松山には生息していない。ヒサマツミドリシジミの雌は夏眠をし、産卵は他のゼフィ

ルスに比べ遅く10月頃行われ、卵で越冬する。

この日の本来の目的は、数としては少ないが、キリシマミドリシジミの産卵場所として古くから知られるアカガシの多い横倉山に産卵状況を確認することであった。勇定則(大阪管区気象庁)、海地節雄(高知昆虫研究会)、安井敏夫(横倉山自然の森博物館)の3名で、目的地に向かった。結局、キリシマミドリシジミの卵は、アカガシの老木の根元から出た幼木の新芽の元で1個見つかっただけであった。

その代わり、登山の途中に、数日前の積雪の重みで倒れたのか、ウラジロガシの巨木・古木が遊歩道沿いに倒れていて、その新芽を観察していたところ、キリシマミドリシジミとは一回り小さい径0.5<sup>ミリ</sup>ほどの小さなヒサマツミドリシジミの卵を勇氏が偶然見つけた。丸くて表面に無数の突起があり、中央部に丸い凹みがある。ふつうブナ科のウラジロガシを食樹とし、その樹冠部の新芽に卵を産み付けるが、稀にアカガシにも産むこともあるようである。結局この日は、丹念に観察を続けた結果、30分ほどで合計4個の卵を採取することができた。卵から幼虫が孵化するのは、一般に3月5日~10日頃であるが、横倉山は標高が高い(卵が見つかった所で標高約700m)ので、20日頃になることも考えられるということである。ちなみに、成虫は6月中旬から羽化する。ヒサマツミ

ドリシジミ、キリシマミドリシジミは、*Zephyrus* (ミドリシジミ属) の中で最も人気の高い蝶といわれる。今回の発見は、ヒサマツミドリシジミとしては、横倉山では初めてということになる。ちなみに、高知県内では、本川村 (伊吹山・越裏門)、土佐山村工石山、西土佐村黒尊、物部村奥物部溪谷などから見つかった。

元々、横倉山はキリシマミドリシジミの生息地として古くから知られていた。それは、キリシマミドリシジミの幼虫が、霧島 (九州)・鈴鹿山脈 (三重県) に次いで日本で三番目に横倉山で見ついているためである。発見は、1962 (昭和37) 年6月19日で、約50年前のことである。キリシマミドリシジミの生態はそれまではっきりしておらず、食樹は主に照葉樹林帯上部に自生するブナ科のアカガシやウラジロガシで、「標高1000m くらいのアカガシの木のある所にいるらしい」と考えられていたのを、当時地元の高校教諭が探している横倉山の山頂付近でアカガシの新芽を食べているのを見つけたという。横倉山には日本唯一ともいわれるアカガシの古木・巨木から成る“アカガシ原生林”が残っているため注目されていたのかもしれない。

キリシマミドリシジミは、ゼフィルス的一种で、“宝石”のような美しい色をし、宝石のような輝きがあることから、“空飛ぶエメラルド”の異名を持ち、その美しさ故昆虫マニアの間でも非常に人気が高く、「日本の美蝶ベスト10」のトップに挙げるマニアもいる。開張約4cmで、非常に高速で飛び、高い所に静止するため、写真に撮ることは至難の技と言われている。キリシマミドリシジミの採集記録地は、県内では、北川村・梶原町中の川・横倉山・旧土佐山村工石山・馬路村 (千本山)・本川村の6ヶ所で、その中でも成虫が相当数採集されているのは横倉山のみである (『四国の蝶』日本鱗翅学会四国支部, 1979)。

分布は、本州 (中～南西部)・四国・九州・対馬・屋久島である。暖温帯の照葉樹林に生息し、食樹 (草) はブナ科のアカガシ、ウラジロガシなどである。卵は直径0.9mmで、アカガシなどの休眠芽の基部に1～数個が産み付けられ、卵で越冬する。成虫は年1回7～8月に発生し、活動期は午前中の主に9～11時頃である。雌雄で色が異なることが多く、翅の表面の色彩は、赤・橙黄・紫・青藍・金緑・銀白など鮮やかな色の変化に富むが、



ヒサマツミドリシジミの採集記録地概念図 (『四国の蝶』日本鱗翅学会四国支部, 1979)

それとは対照的に裏面は雌雄とも褐色・灰色など地味な色をしていて、翅を閉じて止まった時のカムフラージュ (保護色) の役目を果たしている。ちなみに、和名の「キリシマ」は九州の霧島山に由来するが、この蝶が最初に発見されたのは三重県の御在所岳で、三重県では天然記念物に指定され、切手のデザインにもなっている。

この他、横倉山では、かつて日本の国蝶「オオムラサキ」[1957 (昭和32) 年指定] の県下有数の生息地でもあったようである。オオムラサキの幼虫はエノキの葉をエサとして越冬するので、この木がなくなった横倉山ではその姿が見られなくなったのかもしれない。かろうじて、横倉山北側の楠神地区にエノキの木の大木がわずかに残っていて、10年前に横倉山で飛んでいるオオムラサキ (雄) の姿を見かけたという情報がある。しかしながら、アカガシは“アカガシ原生林”として古木・巨木が現在もずっとそのまま残っているので、キリシマミドリシジミは今も生息していると考えられる。

このようにしてみると、横倉山は、化石の宝庫、植物の宝庫に加え、高知県の県鳥であり“幻の鳥” (“森の妖精”とも言われる)・ヤイロチョウや、絶滅危惧種の大型猛禽類・クマタカなどの野生動物も観られ、珍しいキリシマミドリシジミやヒサマツミドリシジミの生息地でもあることを含めると“動物の宝庫”であると言っても過言ではなく、実に自然の豊富な見所の多い山である。

2016年8月に、寄贈された故・大津 修氏のコレクションを中心とする「昆虫コーナー」が、海地氏の協力により横倉山自然の森博物館の1階の植物コーナーの一角に新設されたが、この標本の中にも「キリシマミドリシジミ」が多数含まれていて、美しい宝石のような輝きを放っている。

(やすい としお/横倉山自然の森博物館 学芸員)

## 博物館行事

秋季企画展：『野並允温傘寿記念個展  
～お四国遍路旅を終えて～』  
2016年9月24日（土）～11月13日（日）



越知町出身の洋画家・野並允温氏（大阪在住）の水彩画による絵画展。今回、氏が傘寿（数え年80歳）記念として行っ

た『四国八十八ヶ所参り』の霊場を中心に道中の風景などを描いた絵画約80点を展示。

氏の絵画は、細密画でありながら硬くなく、どことなくほのぼのとしたメルヘンチックな所もあって、観ていて飽きず“癒し系”とよく言われる。今回の展覧会では、“お四国巡り”を通じて体感した「自然との調和」や「人とのふれあい」を絵画の中から特に感じてもらえたらとのことであった。

氏の指導する「向陽会絵画教室」の作品展を、博物館3階展望ロビーで同時開催。

「心が癒されました」という感想が多かったが、それ以外に「まるで実際にその場にいるような感覚になり、感動致しました」「遍路した情景と重ねて拝見しました」「繊細なタッチに感動です」「四国八十八ヶ所参りをしたことを懐かしく思い出しました」「すばらしい作品に感動しました。八十八ヶ所の場面も思い浮かび楽しい一時でした」などの感想があった。



ワークショップ：『草木染教室』

2016年10月15日（土）〔講師：西峰久美、参加者：13名（内事務局1名）〕

ビワの葉を使った「シルクウールのストール（三段染）」を行う。アルミ媒染と鉄媒染を使って染め、その間に媒染を使わない白い部分を残し（曇し染）、草色・灰色・白の三段の草木染ならではの、各々個性のある、上品で落ち着いたストールが仕上がった。



冬期企画展：『越知町の懐かしい写真展—小日浦—』  
2016年12月23日（金・祝）～2017年2月12日（日）



越知町南西端に位置する小日浦地区は、南は旧葉山村（現津野町）、佐川町と接し、遥か南には須崎・野見湾、太平洋を望むことができる。ここのチャートの岩場には、県下では珍しく標高800m 足らずの低地にアケボノツツジの古木から成る群生が見られ、ヒカゲツツジ、トサノミツバツツジ、フジツツジ、オンツツジなどのツツジ類も伴われる。加えて、昨春には町内では初めてタムシバ（モクレン科）が確認された。

一方、この地区最大の溪谷沿いにそそり立つ同系列のチャートの断崖の空洞には、鳥取県三徳山三佛寺の「投入堂」〔平安時代：国宝〕に立地条件のよく似た聖神社があり、“土佐の投入堂”として、その迫力に加え、春の新緑、秋の紅葉の美しさから大変人気を呼んでいる。



また、現在は植林で見れないが、かつて集落の背後の山の旧斜面に、広範囲にまるで天まで延びるような類稀な規模の段々畑があり、その圧巻な雄姿から幻の“天空の段々畑”と呼ばれている。

今回、このような見所の多い小日浦地区の魅力を写真（古いモノクロ写真を含む）・水彩画等で紹介する企画展を開催したが、多くの人に懐かしさを感じてもらい、感動を与えることができたようだ。特に、“土佐の投入堂”と“天空の段々畑”は人気があった。



感想として「良かった」「懐かしかった」「行ってみたい」が多かったが、この他に「企画として地元をテーマにしたとても味わいのある内容でした」「小日浦の自然、素敵ですね。大タラ山、聖神社に行ってみよう」「小日浦はとても素敵な所ですね。そこを大事にされる人々の気持ちも伝わってきました」「小日浦の姿を残そう、伝えようとする方々の活動が本当に素晴らしいです」「記録の大切さを実感させられました。感動しました」などの感想があった。

## 友の会だより

### 「安土城址・犬山城・司馬遼太郎記念館 視察研修」

2016年11月12日(土)～13日(日)〔一泊二日〕

最初の本格的な天守閣をもち中世城郭から近世城郭へと移行させた安土城、現存する日本最古の天守閣をもつ犬山城、そして、安藤忠雄設計による司馬遼太郎<sup>\*</sup>記念館の視察研修を行った。(※名誉高知県人で、長編小説「竜馬がゆく」の作者)

安土城は、近江(滋賀県大津市)の石工集団<sup>あとうしゅう</sup>による野面積<sup>のづらづみ</sup>を特徴とする石垣と、五層七階建ての天守(焼失)を特徴とする平山城。近世の城郭と異なり水堀がなく、石垣も低い、天守に通じる南斜面の大手道の両側に、羽柴秀吉・前田利家・徳川家康等の屋敷や寺を構え、鉄壁でスケールの大きい天下人の居城というにふさわしい。

犬山城は、木曾川沿いに建つ国内唯一個人の所有する国宝の城(平山城:桃山時代)である。立地条件、眺望も素晴らしいが、城内の整備及び天守内の展示の在り方が今一つという印象である。(※高知城の石垣にも採用されている)



司馬遼太郎記念館の展示室<sup>\*</sup>は、建築家・安藤忠雄の設計で、2001年11月1日に完成。高さ11<sup>尺</sup>のコンクリートの打ち放しの壁一杯に書棚が取り付けられ、約6万冊の蔵書が収められている光景は圧巻である。エントランスから緩いカーブを描いて外の紅葉を眺めながら展示室へと続く回廊と、階段突当りの開口部にはめられたステンドグラスがお洒落で印象的である。(※天井の一部にできたシミは坂本龍馬そっくり)

司馬遼太郎記念館の展示室<sup>\*</sup>は、建築家・安藤忠雄の設計で、2001年11月1日に完成。高さ11<sup>尺</sup>のコンクリートの打ち放しの壁一杯に書

### 「杉原神社旧表参道看板設置」〔社高知県森と緑の会助成〕

2016年12月11日(日)〔参加者:友の会会員・一般計7名(内事務局2名)〕

江戸時代からの杉原神社(中ノ宮)への表参道で、牧野富太郎博士も通った歴史的にも由緒ある参道を風化させることなく後世に伝えようという思いで、2013年から博物館友の会・フォレストクラブ、越知平家会、地域おこし協力隊の少数有志らによって旧表参道の草刈、倒木除去などの整備を断続的に行ってきた。3年後の2016年になって上記社団法人の助成を受け、11月27日(日)に看板・案内板の設置を行うに至った。



### 「2017年の初日の出を横倉山で」

2017年1月1日(日)〔参加者:友の会会員・一般計14名(内事務局3名)〕

今年の初日の出は、水平線上にわずかに雲がかかっていたものの快晴で、ここ数年来稀に見る素晴らしい初日の出であった。今年が博物館開館20周年に当るので、思い出に残る年となることを願いたい。

### 「シコクバイカオウレン観察ウォーキング」

2017年2月12日(日)〔参加者:友の会会員9名(内事務局2名)、案内:川瀬卿宥氏(日高村自然観察指導員)〕

牧野富太郎博士が幼い頃からこよなく愛した花で、1月下旬～2月中旬の1年中で最も寒い時期に咲き、“春の訪れを告げる花”として知られる「バイカオウレン」(*Coptis quinquefolia*)の観察会を開催した。

博士の佐川の生家裏山の金峰神社境内にバイカオウレンの群生地があり、博士は幼少の頃からよくこの花を採取・観察し植物への興味を広げていったという。言ってみれば、博士を植物研究へと駆り



立てた植物ということになる。博士にとって「バイカオウレン」は、幼少時代の思い出に加え、故郷土佐を思わせる懐かしい花だったので、郷里から送ってもらったバイカオウレンを東京の自宅の庭で育てて楽しんでいたようである。

四国のみ分布するシコクバイカオウレン(*C. quinquefolia* var. *shikukumontana*)

は、県内では中部で見られる絶滅危惧種で、日高村から佐川町にかけて、また窪川町などでは標高300m以下の低山地にも見られ、特に佐川町加茂では二か所ほどで大群生を形成している。今回は、佐川町加茂地域の林内に群生するシコクバイカオウレンを観察することにした。



「バイカオウレン」は、キンポウゲ科オウレン属に属する多年草植物で、漢名:梅花黄蓮である。オウレン(黄蓮)自体は日本特産種で、バイカオウレンは他のオウレンに比べ花弁状の萼片の幅が広く、梅の花に似ることから、その名がある。また、葉が「五加(うこぎ)」[ウコギ科]に似ることから、別名「ゴカヨウオウレン(五加葉黄蓮)」ともいう。ちなみに、バイカオウレンの学名の小種名:quinqueは「five(5)」を意味する。

この日は、石鎚信仰の石鎚神社のある清宝山(357m)と岩屋を伴う修験道関連(石鎚大権現を勧請した大滝雨瀧神社)の大たびの滝なども同時に観察した。

### 「炭焼き体験」

2017年2月18日(土)〔参加者:友の会会員・一般計12名、指導:齋藤政廣氏(友の会会員)〕

新年最初の炭焼きで、今回は約1<sup>尺</sup>に切ったカシ・シイ・クリなどの枝・割木を窯の中に立てて入れ、出し入れ口に空気の出入りがないように蓋をして、次回の火入れのための準備を行った。

飾り炭として、ミカン・バナナ・松毬などを新聞紙に包んでブリキの缶に入れて一緒に窯の中に入れ、仕上がりを待つ。

## 〔博物館日誌 (抄)〕

- 9月24日(土)～11月13日(日)  
企画展：『野並允温 傘寿記念個展  
～お四国遍路旅を終えて～』
- 10月15日(土)  
ワークショップ：『草木染教室』(にしみね くみ)
- 12月20日(火)  
ワークショップ：『行燈作り』(灯工房ひよこ)  
※博物館の都合により中止
- 12月23日(金・祝)～平成29年2月12日(日)  
企画展：『越知町の懐かしい写真展-小日浦-』
- 3月29日(水)  
博物館協議会

## 〔平成29年度博物館行事予定〕

- 4月15日(土)～5月14日(日)  
写真展：『やや身近な野鳥』
- 5月27日(土)～6月11日(日)  
第39回 高知県写真家協会展『土佐』(選抜移動展)
- 7月25日(火)～28日(金)  
越知中学校職業体験
- 7月22日(土)～9月3日(月)  
夏休み企画展：『四国のツキノワグマ』(仮称)
- 8月11日(金・祝)  
夏休み博物館教室 ～勾玉作り～
- 8月13日(日)  
夏休み博物館教室〔工作〕～オリジナル万華鏡作り～

- 9月23日(土・祝)～11月26日(日)(予定)  
開館20周年記念企画展：  
『横倉山の自然～写真家・高橋宣之の世界～』(仮称)
- 12月  
冬期企画展(未定)

## 〔博物館友の会「フォレストクラブ」活動記録〕

- 11月12日(土)～13日(日)〔一泊二日〕  
安土城址・犬山城(国宝)・司馬遼太郎記念館視察研修
- 12月11日(日)  
杉原神社旧表参道整備-案内板・説明板の設置-
- 2017年1月1日(日)  
初日の出を横倉山で
- 2月12日(日) シコクバイカオウレン観察会(日高村)
- 2月18日(土) 炭焼体験
- 3月4日(土) 炭焼体験

## 〔平成29年度活動予定〕

- 4月9日(日)  
“土佐の投入堂” 聖神社見学とアケボノツツジ観察会
- 5月7日(日) 屋島源平の戦い史跡視察研修(予定)
- 5月下旬 友の会運営委員会・総会
- 6月3日(土) 仁淀川水質調査
- 6月下旬 横倉山のヒメボタル観察会
- 10月 杉原神社旧表参道を歩く(予定)
- 11月11日(土)～12日(日)〔一泊二日〕(予定) 視察研修
- 2018年1月1日(月) 初日の出を横倉山で

## 横倉山ミニ歳時記

### ■マヤラン *Cymbidium nipponicum* Makino

今年は、横倉山でラン科シュンラン属のマヤラン(漢名：摩翁蘭)が数多く咲いた。「マヤラン」は、無葉の菌根菌で、兵庫県神戸の摩耶山で最初に発見されたことから、この和名が付いた。1904(明治37)年、牧野富太郎の率いる調査チームによって採集され、新種として記載・発表された。

特定の樹木の根と共生しているキノコの担子菌類から栄養をもらっている腐生植物(“腐生ラン”)で、茎は緑色であるが緑葉はなく光合成は行わない(ただし、果実期には花茎・果実も葉緑素をもって光合成をしているという)。7～10月にかけて夏と秋の2回花を咲かせる。花は茎頂に1個～数個付ける。

繁殖力が弱く、全国的にも数が極めて少なく、貴重な絶滅危惧種〔環境省レッドリスト：絶滅危惧Ⅱ類(VU)〕である。減少の主要因は、森林伐採・採取で、横倉山で見られるのは、社地で木々を伐採してこなかった日本唯一といわれるアカガシの原生林が残っているためなのだろうか。



写真提供：萩野 善夫氏

## 《開館20周年記念》

今年は、平成9年10月11日に博物館がオープンして20周年になります。展示ケース内のライトのLED化、建物の修繕、一部展示のリニューアル等々のため、お客様にはご迷惑をおかけ致しますが、ご了承ください。なお、博物館の企画する春季企画展は行わず、秋に記念企画展を開催します。

高知県越知町立

**横倉山**  
自然の森博物館



〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12  
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620  
http://www.town.ochi.kochi.jp/

- 開館時間：午前9時より午後5時まで  
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)  
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円(※各20名以上)  
高校・大学生……………400円(上の団体は100円引き)  
小・中学生……………200円
- 越知への交通  
高知——JR特急 約30分——佐川——バス 約15分——越知  
JR普通 約50分

